



# おどり下駄の職人

## 下駄を鳴らせば 巻頭特集 なお楽し

毎年七月から九月まで、二か月間にわたって催される郡上おどり。四〇〇年以上の歴史があり、八月一三日から一六日までの盂蘭盆会の四日間は、生演奏のお囃子に合わせて翌朝まで踊り明かす徹夜おどりで盛り上がる。お囃子と踊り子の調子をつつにするのが下駄の音だ。今回はおどり下駄に関わる三人の職人を紹介しよう。

### おどり下駄職人1

#### ●下駄マサ



**野田政廣さん**  
野田さんは、郡上おどり保存会会員歴約四五年という根っからのおどり助平。郡上おどり開催時は、ほぼ毎晩おどり屋形に上がり、郡上節を歌う。

現在七八歳の野田さんは、かつて林業に就いていた。「山仕事をやっと思ったもんで、木の端切れがたくさんあって、ほんで最初は印籠を作ったんです。印籠なんてもんは、傷むもんでもないですし、それこそ一つあつたら死ぬまであるくらいです。それで、五年くらい前から下駄をつくり始めました。手作り下駄のいいところは、足の大きさに合わせて作れることです。私の場合は五mmごとに大きさを調節します。下駄を作る際は、芯を避け、節のない割れにくい桧を市場で選んで削りだします。少しでも長もちするように、通常のものより歯の幅を広くして長さも1cmくらい長くしています。下駄自体は少し重くなりますが、歯の減りが遅くなり、背も高こうなると好評です」と笑



上・中左)のみを使って下駄の歯と歯の間を削り出す 中右)1本下駄など多種多様な下駄を製作 下)踊り明かして歯が減った野田さん愛用の下駄

う。野田さんが作る下駄は、一本歯の下駄や塗り下駄など十種類ほど。最近では名古屋から体験学習で郡上八幡を訪れた小学生の子どもたちに、下駄作りの工程を教える活動も行っている。「一日に一〇〇人近い子どもたちが訪れる時もあります。下駄づくりを体験したいという観光客もみえて、時間がある時には削り出した下駄の角を丸くする最終工程の作業を体験してもらっています。焼きペンで絵を描く人もいます」と野田さん。下駄を履いて郡上おどりを踊ることの良さをたずねると「リズムが取れること。カラカラと鳴らして、音がとれることです」ときっぱり。野田家は野田さんの孫まで三代にわたって郡上おどり保存会に所属する。家中がおどり好きだからこそ、野田さんが作る下駄は、毎日踊る人のことを考え、耐久性に富んだ作りになっている。

### おどり下駄職人2

#### ●下駄専門杉本履物店 女将 横枕幸子さん



大正時代から下駄店を営む杉本履物店。叔母の店を受け継いだ二代目女将の横枕幸子さんは、鼻緒を上げてくれると踊り子に頼られる存在。「今の人は、生まれて初めての下駄を履くという方もたくさんおいでるので、足に合わせて鼻緒をつけてあげると痛くなってはかわいそうやで」とやさしく話す。店内に所狭しと並ぶ下駄と鼻緒。「鼻緒のデザインは洋服の流行で変わるんな。今年おすすめの鼻緒は、郡上特別支援学校と福祉センターみずほ園、社会福祉法人ぶなの木福祉会の利用者さん達が織った、さわり織のものです。昨年の九月に行われた『ゆかたコンクール』でさをり織の鼻緒の下駄が出版されました。さをり織を鼻緒に使うというアイデアは市役所の女性職員さんのものやそうですが、布が柔らかくてあたりが楽なんです。織物なので色使いもすべて違ってええんな。昨年のコンクールでは十足限定で販売され、注文が多くて、くじ引き



になったと聞きました。お客様にさをり織の良さを理解いただいて、織る人たちの励みになれば良いと思います」。

杉本履物店では、各地の職人や業者から仕入れた下駄に加えて、今回紹介の「下駄マサ」の手作り下駄を販売。「郡上おどりの本場で、二人のおどり下駄職人さんが頑張ってみて嬉しいんです。手作り下駄は、木目を考えて削ってあるので丈夫。お客様にも自信を持っておすすめしています。時間があれば足に合った大きさの下駄も作ってもらえます。今年は、九州の職人さんから入荷される下駄が遅れていてヤキモキしているんです。日常使いのものとして、店には桐、科、ネズコの下駄を置いていますが、おどり下駄はやはり材質の硬い桧がいいんじゃないでしょうか。杉本履物店の常連さんには、ひと夏で幾足もの下駄を履き潰す人もいます。横枕さんが知る最高記録保持者は十五足。鼻緒が切れたりなどのハプニング時も、三代目として活躍する姪の服部亜矢子さんと共に鼻緒を上げる。



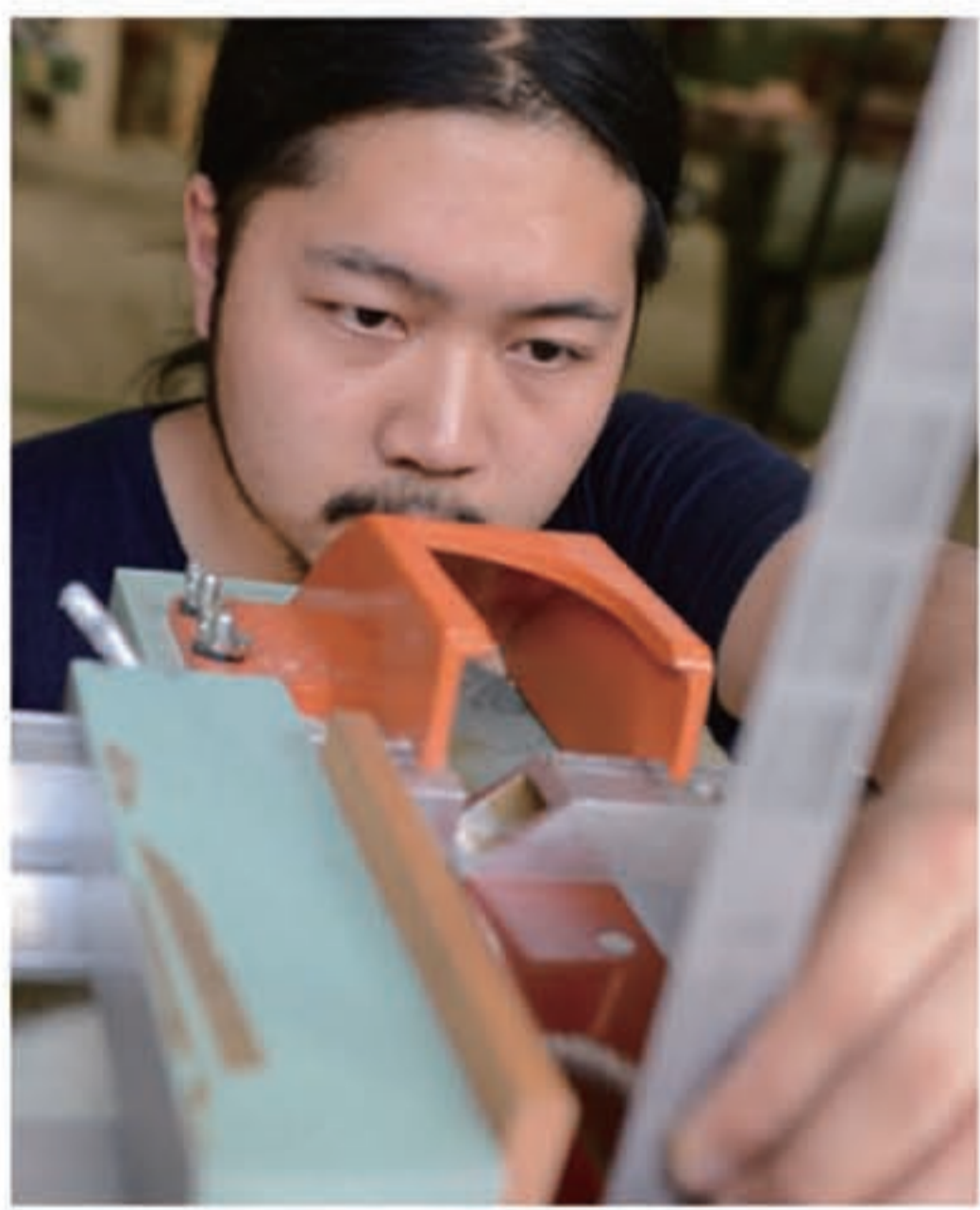
上) 足に合わせて一つ一つ鼻緒を上げる横枕さん 下) さをり織の鼻緒の下駄

### おどり下駄職人3

#### ●郡上木履 諸橋有斗さん



郡上の間伐材の有効活用を提案する株式会社郡上割り箸(代表・小森胤樹さん)の下駄事業部は、郡上の桧を使った下駄ブランド「郡上木履」を立ちあげた。部長を務めるのは諸橋有斗さん。諸橋さんの出身は愛知県で、美濃市の森林文化アカデミー在学中は、地域材を使ったモノづくりを学んでいた。一昨年初めて郡上八幡を訪れ、郡上おどりの虜になる。次いで、おどり下駄に興味を持つようになり、杉本履物店を訪ねるなどして下駄について調べた。「今、国内に流通している下駄は、大分県日田市産の杉を使った下駄、広島県松永市の会社が輸入元の外材を使用した下駄、静岡県産の下駄、中国産のものが多いのを知り、郡上で育った桧を使って下駄を作りたいと考えるようになり、桧は暖かい場所です育つ木で、郡上ではほとんどが美並町で育つたものです。下駄に使う木材は美並町の古川林業さんや鶴飼製材さんで分けってもらって



上) 郡上の桧を使った下駄を世に広めるため力を注ぐ 下) 誰でも作れるように型を作ることで量産をめざす

います」と、郡上市樹種別分布図の資料を使い分かりやすく説明。諸橋さんは、杉本履物店の横枕さんに鼻緒のすげ方を習ったり、下駄マサの野田さんに下駄作りの工程を学び、自身の下駄作りを進めていった。「下駄は特に決まった寸法がないんです(笑)。歯と歯の間隔、高さ、幅などどうしたら一番おどり易く、また歩きやすいかを考え試行錯誤しました。郡上八幡博覧館でおどり実演の講師をされている自称、宇宙一郡上踊りを踊っている國枝あつさんなどの意見を聞いて、鼻緒を通す穴の位置や歯のバランスなど、元となる型を決めました。郡上の木材を使った製品を多く世に出すことが目標なので量産できるような型を作っています。郡上木履の下駄は、丸みを帯びたスリムなデザインが特徴です。鼻緒も地域にこだわっています。渡辺染物店で染めた郡上本染、シルクスクリーン、石徹白洋品店のこきん刺しの生地を使用したものなど。下駄の音は、音楽の一部。郡上おどりは木の音が楽しめる下駄を履いて踊ってほしい」と諸橋さんは話す。この夏、

「郡上木履」は、八幡町内でテナントショップをオープン。店内には、街歩き用にゴム底がついた下駄など、種類の下駄が並ぶ。